

# しばしも休まず槌打つ響き —村の鍛冶屋—

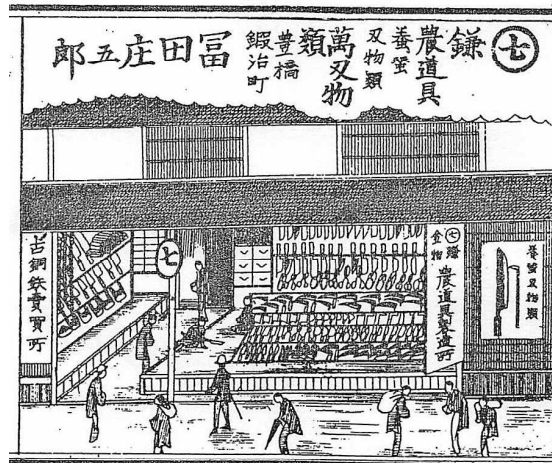
## ■村々で槌音が響いていた

鍛冶屋の朝は早い、とくに夏場は暑さを避け、午前中に仕事を終えることも珍しくなかった。鍛冶場では、木炭を燃料に、吹子を動かして火力を調整する。頃良い温度になったとき、赤まった鉄加工品をつかんで金床に置き、さっと槌で打ちつける。瞬時に火花が飛びことも多い。

その槌音も、弟子が奥方の大槌振りに代わって、次第に機械ハンマーに切り替わっていくが、村にとっては一日の始まりともなる槌音であった。

愛知県内では古くから知多の大野鍛冶と豊橋の吉田鍛冶が知られていた。大野鍛冶は各地に出向いて鍛冶仕事をする出鍛冶を特徴とし、吉田鍛冶は街道筋に店を構えた居鍛冶として栄えていた。

戦後の1947年には愛知県内に700人を超えるに鍛冶屋がいたが、今では10人を切り、槌音も滅多に聞かれない状況となっている。



明治期の吉田鍛冶（『参陽商工便覧』より）

## ■鍬、備中鍬の修理で大忙し

野鍛冶とも呼ばれた村の鍛冶屋の仕事は、新品の農具づくりもあったが、多くは鍬や備中鍬など農具の修理であった。鍬は耕すたびに先端のハガネ（鋼）が磨り減り、切れ味が悪くなる。そのため農閑期には、鍬先に新しいハガネを継ぎ足すこと（鍛接）が必須となる。一つの農具を代々使い続けることは当たり前前の時代であったから、多いときには一日十数丁、年間数百丁から一千丁を超える修理もあった。

一方で、包丁や大工道具など刃物を作る刃物鍛冶と呼ばれる鍛冶屋もいたが、村に根付いていた野鍛冶は、農具、工具、刃物など何でも引き受けていた。時には夕方飛び込んでくる村人にも、夜なべして間に合わせることもあった。村人にとってなくてはならない存在であった。



備中鍬の製作（豊川市、2016.1筆者撮影）

## ■産業遺産として保存された鍛冶設備



動態展示された鍛冶設備（西尾市、2021.3筆者撮影）

農業の近代化、機械化は、野鍛冶の役割を大きく減少させた。農具買い換えの風潮によって修理が激減、あげく後継者難もあって鍛冶屋が次々廃業することになる。

こうした中、鍛冶設備が博物館に収蔵されるところも出てきた。大野鍛冶の地元、知多民俗資料館や愛知製鋼の「鍛造技術の館」がその一例である。

動態展示となった事例もある。町で最後となった鍛冶屋の廃業を機に、「お茶処かじや村」として再現され、鍛冶工房としてオープンしたところもある。

現役の鍛冶屋を目にできるのは限られた地域になったが、懐かしの槌音が、野鍛冶の技術がいつまでも継続されることを願ってやまない。

（天野武弘）